
Y U M E

桜月まき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Y U M E

【Nコード】

N 5 0 1 8 G

【作者名】

桜月まき

【あらすじ】

紅茶とイラストと短編小説のコラボ企画第1弾です。イラストはブログにありますので、よかったらそちらもご覧くださいね。(^ ^)

…はああ、疲れた…。

入社して何日目かの新人研修の帰り道、なつみはよろよろと最寄り駅までの坂道を登る。既に夕焼けは闇にフェードアウトしつつある。日中は日差しがあつて暖かいが、日が沈んでしまうとやはりまだ肌寒い。

なつみはスプリングコートのボタンを全て閉めて、ショルダーバッグを抱え直す。研修の書類がずしりと重い。

なんか…わたし、やっていけるのかな…。

なつみは書類の重さを再認識して不安になる。もともと第一希望の職種ではない。結局望む職場にはどこにもひっかからず、二社から内定をもらったものの、どちらも本当はあまり心惹かれなかった。

でも。

…就職決まっただけでも、ありがたいと思わなきゃ。就職浪人するよりは、いい。

そう思い直して、重い足を前に進める。

…ひゅうつうつ、急に強い風がなつみを襲う。あまりに強い向かい風だったので、また足を止めてしまった。ぎゅっと目を閉じて、風に耐える。

風がやんで、目を開ける。視線は足元にあつた。その足元に、今の風のせいで倒れてしまったのか、パンジーの花がくったりとしていた。

あーあ、かわいそうに。

よく見てみると、その歩道の周りにはパンジーだけではなく、いろんな種類の花が植えられている。ビオラ、プリムラ、アリッサム、まだ蕾のチューリップなど…。お花屋さんかと思うくらい。

目を上げてみると、そこは小さいけれどオシャレなカフェだった。マンションの一階部分に三軒のテナントが入っていて、写真屋さんと音楽教室、その並びの店舗。表はログハウスっぽい木の外装になっている。窓から店内を覗いてみると、柔らかな電球色の照明が、身も心も冷えていたなつみの体を暖かくする。入り口のドアには流木を使ったドアノブと、さりげないプレートが掛かっている。

T e a R o o m * L U P I N U S。

…こんなところにこんな可愛いお店があつたんだ…。研修所へ向かうこの道は、ここ一週間毎日通っているけれど…全然気づかなかった。

このまま真っ直ぐ家に帰っても、きっと余計にこれからの自分に悩んでしまっただろうな…。ちょっとここで、気分切り替えるのも、

いいかもしれない。

そう思って、なつみはその流木のドアノブを押してみた。

「いらつしゃいませー。」

シャラシャラシャラン…と耳に心地のよいウィンドベルの音と同時に、店員さんの声。若い男の人と女の人の声、二人分。入り口になつみの姿を見つけた男性の方の店員さんが、にっこりしながら近づいてきた。

「いらつしゃいませ。お一人様ですか？ カウンター席でもよろしいですか？」

ウェイターさん…なつみより少し年上か同じくらいだろうか、人懐っこい笑顔でなつみに問いかける。なつみは頷いて、彼の案内に従う。

店内も外装と同様、ウツディな感じ。カウンター席が五席と、二人掛けの席が三組、という、こじんまりしたお店。明るいナチュラルウッドの椅子とテーブルは、手作り感のある温かみのあるものだ。椅子にはグリーン地にイエローの細かいストライプのクッションが敷いてあり、カントリー調を演出している。木の枠がオシャレな窓辺と各テーブルには、外に咲いていた春の花々が、小さなガラスの一輪挿しにちょこんと納まっている。

誰もいないカウンター席に案内されたなつみ。隣の席の椅子にバッグとスプリングコートを置いて、おずおずと席に着く。

カウンターの向こうには、真剣なまなざしでティーポットに熱湯

を注ぐ女性がいた。もうひとりの声の持ち主だ。長いウェーブした髪のを無造作に束ねて、化粧つけはあまりないけど、綺麗な大人の女性…。この人が、このお店の店長さん？

ウェイターのお兄さんがニコニコしながらメニューをなつみに手渡してくれる。

「ご注文が決まりましたらお呼びくださいね。」

そう言ってカウンターに入る。先ほど店長？のお姉さんが淹れていた紅茶のポットとティーカップをトレイに載せて、テーブル席へと運んでいく。

なつみはメニューを開いてみる。

…わ、紅茶の名前がいっぱい…！ 数ページにわたる紅茶のメニューは、ざっと百種類を超えているように思う。

紅茶専門店なんだ。ああ、入り口に Tea Room って書いてあったつけ。

なつみはしばらくメニューとにらめっこ。…あんまりたくさん種類がありすぎて、迷ってしまう…。

「…たくさんありすぎて、決まらない？」

カウンターの中からアルトの耳障りのいい声。なつみがびっくりして目を上げると、お姉さんが微笑みながらなつみの前に立っていた。

「あ…はい、こんなたくさん、紅茶の種類って見たことなくて…」

しどろもどろ、なつみが答える。もともと初対面の人と話するのは少し苦手ななつみ。そのせいでこの新人研修でも、なかなか友達ができずにいた。

「じゃあねえ…、わたしのおススメの紅茶でいいかな？」

チャームングにウィンクして、お姉さんはそう言う。そのしぐさがすごく大人可愛い。なるほど、お店の雰囲気、甘すぎないけど可愛い系なの、お姉さんの持つ雰囲気から来てるんだ…
頷ける。

「は、い。お願いします。」

ちょっと面食らったけど、なつみはお姉さんのウィンクに流されて頷いてしまった。まあ…いいか。店長さんのおススメなんだから、そうそう妙なものは出てこないだろう…。

お姉さんが紅茶を淹れにカウンターの奥に下がっていったので、なつみは改めて店内を見回してみる。

カウンターの向こうの木製の大きな棚には、いろんな種類のティーカップが一客ずつ。…聞いたことある。お客さんの雰囲気とかに合わせてティーカップを選んで出すお店。ここも、そうなのかな？

テーブル席には大学生風のカップル、一人で文庫本を読むOLさんっぽい女性、アラサー世代の女性二人連れが、それぞれ思い思いの時間をティーカップ片手に楽しんでいる様子。

飾らないナチュラルなお店の雰囲気と、BGMのさりげないピアノ曲が、凝り固まっていたなつみの心身をゆるゆるとほぐしていく…。

いいなあ、このお店。

さっきまで冷たい風と研修のプレッシャーに押しつぶされそうだったなつみは、ようやくほっと一息つけた気がした。はふう、と短くため息をついて、水を飲む。

「…就活中？」

ティーポットにお湯を注ぎながら、お姉さんがカウンター奥からなつみに話しかけてくる。きつとなつみのリクルートスーツ姿を見て、そう判断したのだろう。

「あ、いえ、就職はしたんですけど…今、新人研修中。」

「へええ、じゃ、就職おめでとう！だ。」

なつみが答えると、お姉さんはぱあっと明るい笑顔でそう言っ、砂時計を逆さにする。なつみははにかんで苦笑。するとお姉さんはそれを見逃さずに首をかしげる。

「あれ？あんまり就職決まって嬉しそうじゃないのね。仕事、思ってたのと違った？」

なつみは心の中を読まれたようで赤面する。お姉さんはふふふ、と笑う。

「図星？」

「…っというか…」

なつみは思わず話し出してしまふ。自分でも、なんか不思議だ。初対面の人に、こんなに早く自分から話をしようなんて、普段は思わないのに…。このお店の雰囲気のせいか、このお姉さんの笑顔のせいか、…ほっこりした魔法にかかってしまったみたいだ。

「もともと、第一希望の職種じゃないんです。でも内定もらえたのがそこともう一つしかなくて…どっかかっていたらこっちの方がいいかなあ、って思って…決めたんですけど…」

お姉さんは優しい表情でなつみの話を聞いている。

「就職浪人したくなかったし…本当のやりたいコトは、どこに就職してもできるかな…なんて甘いこと考えてて…」

なつみの体がカアアツと熱くなる。親にも友達にも話したことないこと、なんで今この全然知らない人に話しているんだろう…。

「新人研修、思ったよりハードで、こんなんじややりたいコトどころじゃないなあ…やっていけるのかなあ、なんて…」

少し涙目になるなつみを優しく見つめていたお姉さんは、砂時計の砂が全て落ちたのを確認して、ティーカップに紅茶を注ぐ。

「はい、お待たせしました。」

なつみの目の前に可愛らしいピンクの花柄のカップが置かれる。

綺麗な深みのあるオレンジ色の水色から漂う香りは、甘く、柔らかく、うっとりするくらいロマンティック。思わず深く息を吸い込みたくなる。…というか、無意識になつみはそうしていた。

「…いただきます。」

なつみはひとくち紅茶を口にする。…口の中に広がる、フルーツのような甘酸っぱさ。甘やかな香りが、体の中にすうっと溶けていく。

…美味しい。

なつみはニコニコ自分を見ていたお姉さんを見上げる。…目をちゃんと合わせたのは初めてだ。今飲んでいる紅茶と同じように、暖かい、柔らかい微笑み。美味しくて、優しくて、涙が出そうだ。

「美味しい？」

お姉さんが尋ねる。なつみは迷うことなく頷く。頷いてまた、紅茶を飲む。

「これ、なんていう紅茶ですか？」

なつみが問うと、お姉さんはにっこり、意味ありげに笑う。

「あなたにぴったりの紅茶だと思うわよ。優しく甘いバニラに、若々しく甘酸っぱいフルーツと、華やかなバラの香りの幸せのお茶。」

そういつてメニューのページをペラペラとめくって、手を止める。ある一つの紅茶の名前を指で示す。

YUME（ルピシア）。

ゆめ…、夢。

なつみの頭の中に、夢…本当にやりたいコト、がハイビジョンで広がっていく。おもちゃ箱をひっくり返したみたいに。

「ゆ、め…」

「さっき言ってたわよね、本当のやりたいコトは別にある、みたいなこと。それがあなたの“夢”？」

優しくお姉さんがなつみに問いかける。

「…もしよかったら、聞いてもいい？」

じわじわと涙があふれてくる。バッグからハンカチを取り出して慌てて拭う。鼻をすすって、もうひとくち、YUMEを飲んで、なつみは問いに答える。

「わたし…、本当は…絵本作家になるのが、夢なんです…。だから、子供が近くにいる職業…学部上教員免許は取れなかったから、学校事務とか…子供と関係のある仕事があったんです…。でも、どこにも受からなくて…。結局決まったのは子供とは全く関係のないところだったけど…どんな仕事しながらでも、絵もお話も、書い

ていける、そう思って…」

だんだん言葉に詰まっていく。涙があふれてきて、言葉にならない。

「絵本作家かあ…。素敵な夢ね。」

泣いてしまったなつみに、優しい微笑みを浮かべながらお姉さんが言う。その言葉に、なつみは余計泣いてしまう。

…今まで誰にも、絵本作家になりたいなんて、恥ずかしくて話せなかった。話したとしても、そんなのなれっこないじゃん、って言われるのが怖くて…。でも今、目の前のこの人は、素敵ね、って言うてくれた。そのことが、ただ嬉しくて…。

お姉さんは続ける。

「夢ってね、諦めさえしなければ、必ず叶うものなのよ。信じられないかもしれないけど、叶わない夢は、決して見ることはできないの。」

ハンカチで涙を拭って拭って、くしゃくしゃの顔で、なつみはその言葉を理解できなくてお姉さんの顔を見る。お姉さんにはっこり笑う。

「夢は、もともと自分の中に眠っているの。春を待つ花のようにね。その蕾を摘んでしまわない限り、ゆっくりゆっくりかもしれないけど、綺麗に咲く日が来る。絵を描くこと、お話を作ること…大好きでしょう?。」

お姉さんにそういわれて、なつみは頷く。大好き…やめろといわれても、やめられない。誰にも恥ずかしくて言えなかったけど…やめることは考えたことがなかった。思いつきもしなかった。

「じゃあ、諦めずに続けていけば、きっといつか花が咲く。必ずチャンスは来るから、ただそのチャンスだけ、見逃さないように。あと、夢を叶えるんだ！ って力まないことかな。ニュートラルな気持ちで…そう、紅茶を飲んでリラックスするみたいに、自然体で行くのが、一番。…今日のこの紅茶は、そんなYUMEを叶える、魔法の紅茶。」

YUMEを叶える…魔法の紅茶…。

それも、もちろんあると思うけど。

なつみはまた鼻をすすって、紅茶を飲む。柔らかい、甘い香り。

自分の心を暖かくしてくれた、和ませてくれた、やわらげてくれた、勇気付けてくれた…魔法の紅茶。

諦めずに、続ける…。今までだって、やってきた。チャンスだけ、逃さないように…でも力まずに。なつみはお姉さんの言葉を噛みしめるように頭の中で繰り返し返す。

なんか、やっていけそうな気がする。

いつの間にか、そんなポジティブな考えが、なつみの体中にあふれていた。

…YUMEの、力。

カップから目を上げると、お姉さんの柔和な微笑みと目が合った。やっと、なつみは彼女に微笑みを返すことができた。

「で、多嘉子さんのYUMEは、なんなんですか？」

いつの間にかカウンターにお兄さんが戻ってきていた。使用済みのカップを片付けながら、お姉さんに問う。

「わたしの夢？ そんなの決まってるじゃない、白馬に乗った福山雅治さん似のイケメンが迎えに来てくれて、ゴージャスで幸せな家庭を築くこと」

「…無理。歳考えなさいって。さつさと諦めたほうがいいですよ。」

「うるさい！ あ、ありがとうございましたあー。ホラ、お客様レジで待ってる！ さつさと行く！！！！」

その二人のやりとりがまるで漫才のようで、なつみは笑ってしまった。

いいなあこのお店。また、来よう。

そう思いながらまた紅茶を、YUMEを、飲む。

心の中で、ありがとう、と感謝の気持ちを込めながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5018g/>

Y U M E

2010年10月14日14時56分発行